

ベルクソンにおける神の概念について

新 村 一 宏

本論文は、アンリ・ベルクソンの最後の著作である『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』と表記）における「神」という言葉の意味の考察を目的として書かれている。

ベルクソンが活動していた時期は、十九世紀末から二十世紀前半にかけてであり、哲学の領域ではすでに「神の死」が宣言され、社会においても政教分離法が成立していた。そのため、ベルクソンは自らの哲学を、神を前提に構想する必要はなかったはずだし、事実、『二源泉』以前の著作では、主要な概念として「神」が登場することはほとんどない。これに対して、『二源泉』において突如として、「神」という言葉は頻繁に使用されることになるのである。確かにこの著作でベルクソンはカトリックを他の宗教と比較して特権的地位を与えており、ジャック・シュヴァリエの『ベルクソンとの対話』の1938年のベルクソンの発言をもとに、この「神」をカトリックの神と同一視することも一見したところ可能であるだろう。しかしながら、これはひとつの可能な解釈ではあるかもしれないが、同時にまた性急な解釈であるように思われる。なぜなら、このような解釈はベルクソンの哲学をカトリックの教義に還元してしまうことになってしまうからである。そもそもベルクソンの哲学自体はカトリックの教義と同一視しうるものではない。

それゆえ本論文では、カトリックや他の宗教からも距離を置いた地上に『二源泉』を中心に置きつつ、上記のテーマについての検討を進めていきたい。

1 創造と神

ベルクソンは個人的にはカトリックに大いに惹かれていたとはいえ、ベルクソンの哲学はいかなる意味においてもカトリック思想と完全に重なりえないと思われる。むしろ、両者には相容れない部分が残るように思われる。

ベルクソンにおいて「神」という言葉が初めて意識的に使用されるのは、『創造的進化』においてである。この著作においては、生命はある中心から吹き出す一つの大きな流れ、不断の創造であると見なされ、ベルクソンはこれを「神」と呼んだ⁽¹⁾。さらに、『精神のエネルギー』に収められた「意識と生命」においてベルクソンは、『創造的進化』におけるこうした議論を再び取り上げつつ、「無から何かを引きだし」、「神のような欲び」といった表現を用いて創造について論じている⁽²⁾。こうした見解は、『二源泉』においても保持される。このことから、カトリック

の教義の神による生物種の創造と、ベルクソンの生命論が合致するような印象が生ずるかもしれない。

しかし、ここでベルクソンが重きを置いているのは、まさに生命の本質ともいえる予見不可能性にはかならない。実際、「意識と生命」では、上記の表現のすぐ後に、生物種について「自然は予見のできない新しさの果てしない開花としてあらわれます」と付け加えているのである。ベルクソンは、生命の原理を説明するに当たり、機械論を退けたわけであるが、「ヒツジは食べられるために作られた」というような場合に見られる目的論も、機械論を逆向きにしただけであると見なして批判した⁽³⁾。生命は時間の中で生きている以上、常に変化すると同時に、そこには新たなものが付け加わっていくのである⁽⁴⁾。回顧的に原因を探求するにせよ、あらかじめ目的が想定されていたと仮定するにせよ、錯覚に陥ることである。事実、『二源泉』で次のように言明される。

純粹機械論または純粹目的論の立場に立てば、両者いずれの場合にも、生命の諸創造は前以って決定される、というのは、未来は現在から計算的に演繹されうるか、または觀念の形の下で現在のなかに描かれうるか、そのいずれかだからであり、従って時間はむなしなものとなるからである⁽⁵⁾。

このように、時間の中で生命が進化してきたというベルクソンの生命観は、神による目的論的創造と重ね合わせることはできない。確かに、神によってすべてが調整されて創造されたのなら、「なぜ神はもっと前に世界を創造しなかったのか」というアポリアに陥り、時間は無意味なものになってしまうであろう。ベルクソンが生命の予見不可能な新しさを生み出すことを「創造」と呼び、「神」という表現を用いていたことは確実である。だが、そもそもその時ベルクソンが重視していたのは創造主と被造物の関係ではなく、生命のエネルギーそのものであり⁽⁶⁾、メルロ＝ポンティも指摘したように、その神に「自我」を認めることはできないのである⁽⁷⁾。では、『二源泉』においてはどのような議論が展開されるのであろうか？

2 開いた社会 (la société ouverte) と閉じた社会 (la société close)

周知のように、ベルクソンは『二源泉』で、「閉じた社会」と「開いた社会」という概念を提示する。ベルクソンによれば、生物はその進化と並行して、自然と社会を形成するようになるわけであるが、このことは、動物や昆虫の群れも非常に高度で有機的な社会を持つことからしても明らかである。我々の社会もそうした集団の延長線上にある。しかしながら、そうした社会はベルクソンに従うならば、すべて「閉じた社会」である。この場合の「閉じた社会」とは、自らを守り、他者を排斥するという本質を持っており、それゆえに、動物の群れより発展しているにも

関わらず、我々の社会同士の間にも戦争が起こるのだ⁽⁸⁾。これに対し「開いた社会」とは、特定の集団ではなく、全人類を抱合する社会、全てのものに対する愛を意味する。もちろんこの「開いた社会」は現実には存在したことはない。

時折、まず家族愛、次に愛国心、という具合に愛の対象を拡大していけば、人類愛にまで到達するかなのような議論がなされるのを見受ける場合がある。しかし、これは幻想にすぎない。なぜなら、「閉じた社会」と「開いた社会」の間に存在するのは程度の差異ではなく、質の差異だからである⁽⁹⁾。愛国心を奉ずる理論は、ベルクソンが再三に渡って警告したような、質と程度との混同にとらわれたままなのである。愛国心をどんなに拡大したところで、他者の排斥という本質は残ったままであり、人類愛に到達することは決してない。ジャンケレヴィッチはこの点に関して次のように解説している。

ところで、人類は定義上全体である。したがって人類を愛するためには、またこの意味で『極限に』移行するためには突然の決心、回心、『変身』が必要である。[……] たしかに国家や家族のような閉じた共同体の中にも愛はある。しかし何者かに対抗しつつ愛すること、敵を排除しつつ愛することは、それだけでは隣人愛にほかならないあの無限の愛をもって愛することではない。したがって家族と国家の間に溝などはない。それらはつまるところ同じタイプの二つの集団なのであって、本当の溝は国家と人類の間にある⁽¹⁰⁾。

「愛」という言葉を冠しながらも、愛国心の名の下にどれだけ残忍なことが行われてきたか、または行われているかを考えれば、ベルクソン、ジャンケレヴィッチの主張は容易に納得がいくであろう。では、この二つの社会の間の断絶はどのようにして超えられるのだろうか。この間隙を飛び越え、「開いた社会」を到来させるのが、「愛の躍動」と呼ばれるものである。

すなわち、彼らは、自分の受け取ったものを自分の周囲に拡める必要を愛の躍動として感じとる。それは彼らがそれぞれ自分の人格の特徴を刻みつける愛。かくて、人間生活の調子を一変させ得る全く新しい情緒として、彼らひとりびとりのうちにある愛。彼らのひとりびとりがこのように彼自身として愛せられるようにする愛。他の人々が自分の魂を、彼によって、彼のために、人類愛に開くようにする愛。彼らに、あるいはいつも生き生きとした彼らの追憶に愛着し、自分の生活をこうした手本に合致させたような人物の媒介によっても、充分よく伝えられる愛。もっと遠く進もう。偉大な神秘家の、あるいは彼らの模倣者である誰かの、言葉が我々の間のこれこれの人の心に反響を見いだすのは、ただ目をさます機会を待っているだけの眠れる神秘家が我々の心の中にいるからではないか？ [……] この場合には、人はある人格—それは道徳生活の啓示者の人格でも、あるいはその模倣者のひとりの人格でも、

さらに、ある事情においては自分自身の人格でさえ有り得る一の呼び声に応答する⁽¹¹⁾。

「閉じた社会」と「開いた社会」の間には質の差異があるために、「愛の躍動」による、いわば精神的進化が必要とされるのである。ジャンケレヴィッチが「変身」と呼んだのはこうした精神の質的進歩のことだと考えられるであろう。ベルクソンはこうした躍動を体験した人々を「神秘家」と呼んでいるが、ここで注目すべきは、上記の引用の末尾で述べられているように、個々の人間の中にも、潜在的な形で神秘家が存在している、ということである。だからこそ、人類が「開いた社会」の実現へと進んでいく余地があると言えるのだ。

3 神と愛

ベルクソンは、「閉じた社会」を保つという役割を持った「静的宗教」(la religion statique)が自然に発生すると論じる。動物や昆虫は本能によって縛られているために、自らの群れにおける役割に一生嵌まり込んだままであるほかはない。しかしながら、人間の場合は知性があり、ある程度自由に活動できるために、共同体の解体に繋がりがねない行動や、自分勝手な行動も取りかねない。そのため、社会を存続させるために、知性に対する防御作用として「静的宗教」が生み出されなければならなかった、というわけである⁽¹²⁾。宗教戦争が起こるのも、既存のあらゆる宗教は多かれ少なかれ「閉じた社会」に結びついた「静的宗教」という性格を帯びているからだと言えるであろう。これに対して、「開いた社会」と一体となっているのが「動的宗教」(la religion dynamique)である⁽¹³⁾。ベルクソンは『二源泉』における「動的宗教」を扱った第3章において、以下のように「神」を論じる。

なぜならば、彼（神秘家）を焼き尽くす愛は、もはや、単にひとりの人間の神に対する愛ではなく、すべての人間に対する神の愛だからである。彼は、神によって、神を通して、神的な愛で全人類を愛する。それは、哲学者たちが元来すべての人間は同じ理性的本質にあずかっているということを論証して、理性の名において、勧告した同胞愛ではない⁽¹⁴⁾。

あるいはまた、

神は愛であり、そして、愛の対象である—そこに神秘主義の寄与のすべてがある〔……〕神的な愛は、神のなにもものかではなく、神そのものであるという点である⁽¹⁵⁾。

ベルクソンはこのように、神に具体的人格を与えるのではなく、神を人類愛そのものであると定義する。ただし、この場合の「愛」という言葉には注意が必要である。なぜなら、先の一つ目

の引用でベルクソン自身も注意を喚起しているように、ここで言われている「愛」は、例えば家族や祖国に対する愛、といったような特定の対象を持った愛ではないからである。「愛」そのものであると同時に「愛」の対象でもあるとされる「神」という言葉によって、こうした「動的宗教」における対象のない「愛」が表現されているのである⁽¹⁶⁾。ベルクソンは上の引用に先立つ『二源泉』第1章で、「開いた社会」を次のように提示していた。

もう一つの態度は、開いた魂の態度である。この場合には、なにがなかに入り込むのであろうか。この魂は人類全体を包容する、といっても、言い過ぎではないだろう。言い足りないとかえいえるだろう。なぜならば、この魂の愛は、動物や植物や、自然全体にまで、及ぶからである。[……] 慈悲心は、地上になんらの他の生物ももはや存在しないような時でさえも、その心を持つ者のうちに生きつづけるだろう⁽¹⁷⁾。

『二源泉』において、「神」と同一視される「愛」は、無限の愛である。しかし、こうした「愛」は、観想的なものでもなければ、また単に観念的なものでも決してない。なぜならベルクソンにおいて、宗教は行動であるからだ⁽¹⁸⁾。ベルクソンは「神秘家」を分析する際、キリスト教においては「神と決定的に合一する」ことが証言されていることに着目する⁽¹⁹⁾。ベルクソンがカトリックを特権視するのも、この点においてであり、カトリックの聖人は、こうした愛を体現し、人々の考えを一変させた人々であるとされる⁽²⁰⁾。アンリ・グイエは、対象を持つ愛は必然的に限界を持つと考える一方で、この対象なき無限の愛をキリスト教に見出せると解釈した⁽²¹⁾。ベルクソンが自らの哲学に沿って様々な宗教を検討した結果、「動的宗教」に最も近いと見なすことができるのがカトリックだったのであり、ベルクソンの哲学の出発点にカトリックがあったわけではない。ベルクソンの宗教論を、カトリックを最も高く評価するためのものであると見なすならば、目的と結果を取り違えることになるであろう。

4 神を作るマシン

周知のとおり、『二源泉』はベルクソンの晩年に書かれた最後の著作であり、以下に引用するその末尾の言葉はベルクソンの著作における最後の言葉ということになる。

人類は、自らが成し遂げた進歩の下で、半ば押しつぶされてうめいている。人類は自分の未来が自分次第だということを十分には知ってはいない。まず人類は、生き続けようと欲しているのか考えなくてはならない。次に人類が自らに問うべきは、単に生きたいだけなのか、それだけでなく、反抗的なこの地球の上においてさえも、神を作るマシンである宇宙の本質的機能が開花するように必要な努力を提供しようと欲しているのかどうか、ということである⁽²²⁾。

この一節は、迫りくる不安と一筋の希望が混濁し、きわめて謎めいていると同時に魅力的であるが、特に注目すべきは、「神を作るマシン」(une machine à faire des dieux)という言葉である。フランス語の原文では、この言葉が末尾に、さらに« des dieux »が最後に来るように意図的に配置されているからである。

この言葉については、主に次の二点の疑問が提起されるであろう。一点目は、なぜ「メカニスム」(哲学的な意味での「機械論」と、機械中心の文明という、両方の意味が含まれる)を批判したベルクソンが、最後になって「マシン」という言葉を使ったのか、ということである。もう一点は、そもそも「神を作るマシン」とは一体どういう意味なのか、ということである。

まず、「マシン」という言葉について検討をおこなうならば、ベルクソンは必ずしも「メカニスム」を完全に否定したわけではない。ベルクソンによれば、メカニスムと「神秘主義」はどちらも人間存在に本来的に含まれているものである。ベルクソンの主張の要点はむしろ、別の箇所でも用いられた表現を取り上げるならば、知性的、科学的な探求である「科学の真理」(les vérités scientifiques)と精神的深化である「感情の真理」(les vérités de sentiment)という二つの真理があり⁽²³⁾、従来は「科学の真理」ばかりが重視され、結果として今日の科学的、経済的、物質的繁栄がもたらされたが、それだけでは地球上の諸問題を解決することはいかなる意味でも不可能であり、この両者が互いを補い合うことが重要である、という点に求められる⁽²⁴⁾。ベルクソンは現在の科学がもたらした成果も尊重する。あまりに知性的な見方に偏りすぎ、物質的發展に精神が追い付けず、科学技術を使いこなすだけの精神を我々が持ち合わせていないことこそ問題とされるのである⁽²⁵⁾。「マシン」は「メカニスム」とは異なる。「マシン」は我々がこれを自由に使いこなせるということの意味すると捉えられる⁽²⁶⁾。ベルクソンの哲学は単なる文明批判ではない⁽²⁷⁾。ルソーに見られるような「高貴な野蛮人」、聖書に描かれているような原初の楽園は、ベルクソンの理論からすれば幻想である。先に見たように、自然的なものは他者と争う本質を持った「閉じた社会」と「静的宗教」であり、「開いた社会」を実現するためには、「愛の躍動」という我々の努力による精神的進化が必要だからである。

さて、この最後の二節を、カトリックの視点から読み直すならば、奇妙なことに気付くであろう。それは、「神を作るマシン」の「神」が、日本語だと表現することはできないが、フランス語の原文だと不定冠詞の複数形で表記されている点である。実際、ベルクソンはカトリックを大いに信奉しているかのように描いたシュヴァリエも、この最後の表現に関して曖昧さを感じたようである⁽²⁸⁾。

しかし、この不定冠詞の複数形で表された「神」こそ、ベルクソンが「神を作るマシン」に託した意味を読み解く鍵であろう。今までの議論を検討すれば、この言葉の意味はおのずと明らかになるはずである。まずベルクソンは「神」を、特定の神ではなくすべてのものを包み込む無限な愛であると定義していた。そして、そうした愛に触れた人々のことを、「神秘家」と呼んだ。

この全てのものを含む愛は、我々には理解が難しいと思われるかもしれない。だが、我々の中にも、内なる神秘家が存在するのであり、我々の心は火を灯されるのを待っているのだ。それゆえに、「開いた社会」の到来を思い描くことができるのである。ベルクソンが我々に言い残したことは、我々が全人類に心を開き、この世の全てのものを愛する努力をひとり一人が追求すべきである、ということであろう⁽²⁹⁾。

つまりは、「神を作るマシン」とは、我々の精神が十分に進歩し、行き過ぎた科学的、物理的発展を抑えつつ、知性が得た成果を全人類のために使いこなせるようになった状態を表しているのではないだろうか。

結 論

ベルクソンにおいて、「神」という概念は、キリスト教および特定の宗教の「神」を指し示しているわけではない。その根拠として以下の二点を指摘することができる。

一点目は、ベルクソンは「神」を、無限の愛、対象を持たない愛を表す言葉として用いていることである。こうした、通常の意味とは異なる「愛」を表現するために、ベルクソンは「神」という言葉を使わざるを得なかったのであろう。「持続」(la durée)、「イマージュ」(l'image)といった概念の場合もそうであるように、日常語を独自の哲学的用語として用いるということは、ベルクソンにおいては珍しいことではないといえる。

二点目は、「神を作るマシン」というベルクソンの最後の言葉において、「神」が小文字かつ、不定冠詞の複数形で表記されている点である。これが仮にカトリックの神を意味するとすれば、このような表現法は不自然であるだろう。しかしながら、この文章はベルクソンが我々一人ひとりの魂に向けて発していると思えば、この表記もまた納得のいくものとなるのである。

現在、我々の科学の発展はとどまるどころを知らず、それによってもたらされる惨禍もまたより大きなものとなっている。そればかりでなく、ナショナリズムの高揚が不寛容さと結びつく様はひしひしと肌身に感じられ、また戦争や飢餓の問題も依然として未解決のままであり、未来は絶望的に思えるかもしれない。しかしながら、ベルクソンの言うように、「人類は自分の未来が自分次第だということを十分には知っていない」のである。特異な「神秘家」の到来をただ待つだけでは不十分であろう。ベルクソンは全人類に向けて、「開いた社会」を実現すべく努力するように呼びかけているのである。ベルクソンの探求した直観的、精神的探求の意義は、現在において一層その重要さが際立っているのである。

注

(1) EC, p. 706, 249: « j'exprime simplement cette similitude probable quand je parle d'un centre d'où les mondes jailliraient comme les fusées d'un immense bouquet, - pourvu toutefois que je ne donne pas ce cen-

tre pour une *chose*, mais pour une continuité de jaillissement. Dieu, ainsi défini, n'a rien de tout fait; il est vie incessante, action, liberté. La création, ainsi conçue, n'est pas un mystère, nous l'expérimentons en nous dès que nous agissons librement ».

本論文では、ベルクソンの著作からの引用はPUF 生誕百周年版全集を底本とし、前に全集の項数、次に単行本の項数を記す。略号は後述。ベルクソン以外の著作については、その都度著者とタイトルを示す。

- (2) *ES*, p. 833, 24 : « une joie divine », « la création de soi par soi, l'agrandissement de la personnalité par un effort qui tire beaucoup de peu, quelque chose de rien ».

予見不可能性について述べられている箇所は、*ibid*, p. 833, 24 : « Vue du dehors, la nature apparaît comme une immense efflorescence d'imprévisible nouveauté ». 尚、同講演では他にも、「危険と冒険への道」(*ibid*, p. 823, 12 : « c'est le risque et l'aventure »)、「たしかに、進化する力に内在する自由は予測しえなかった形態の創出において示されています」(*ibid*, p. 829, 20 : « la liberté immanente à la force évolutive se manifeste encore, il est vrai, par la création de formes imprévues »)といった表現がなされている。但し、より高次の創造として精神的創造が思い描かれていることにも注目すべきであろう (*ibid*, pp. 833-834, 25-26)。この精神的創造が、本文中で言及するが、『二源泉』に至って「愛の躍動」と呼ばれるようになるのであろう（『精神のエネルギー』は『創造的進化』と『二源泉』の間に出版された）。

- (3) *EC*, p. 533, 45-46 : « C'est pourquoi le finalisme radical est tout près du mécanisme radical sur la plupart des points. L'une et l'autre doctrines répugnent à voir dans le cours des choses, ou même simplement dans le développement de la vie, une imprévisible création de forme [...]. C'est pourquoi ils s'accordent encore à faire rase du temps. La durée réelle est celle qui mord sur les choses et qui y laisse l'empreinte de sa dent. Si tout est dans le temps, tout change intérieurement, et la même réalité concrète ne se répète jamais ».

- (4) こうした議論について詳しくは、*La pensée et le mouvant* 所収の“Le possible et le réel”を参照。

- (5) *MR*, p. 1072, 119 : « Qu'on se place dans la doctrine du pur mécanisme ou dans celle de la finalité pure, dans les deux cas les créations de la vie sont prédéterminées, l'avenir pouvant se déduire du présent par un calcul ou s'y dessinant sous forme d'idée, le temps étant par conséquent sans efficace ».

- (6) *EC*, p. 705, 209.

- (7) Maurice Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie*, p. 17

- (8) *MR*, p. 1000, 25 : « des sociétés closes. Elles ont beau être très vastes en comparaison des petits groupements auxquels nous étions portés par instinct, et que le même instinct tendrait probablement à reconstituer aujourd'hui...: elles n'en ont pas moins pour essence de comprendre à chaque moment un certain nombre d'individus, d'exclure les autres ».

- (9) *Ibid*, p. 1002, 28, p. 1202, 284など。

- (10) Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, pp. 185-186 : « or l'humanité, par définition, est tout. Pour aimer l'humanité, pour passer < à la limite >, il faut donc une décision soudaine, une conversion, une < métabole >. Les familles et les États se posent en s'opposant, car ce sont des sociétés finies, et qui se refusent les unes aux autres. [...] Il y a certes de l'amour dans les communautés closes, nation ou famille: pourtant, aimer contre quelqu'un, aimer en excluant des ennemis, ce n'est pas encore aimer de cet amour infini qui est la charité. La coupure véritable n'est donc pas entre la famille et la cité, qui sont, en somme, deux groupements du même type, mais entre la cité et le genre humain ».

- (11) *MR*, pp. 1059-1060, 102-103 : « Ce qu'ils ont laissé couler à l'intérieur d'eux-mêmes, c'est un flux descendant qui voudrait, à travers eux, gagner les autres hommes: le besoin de répandre autour d'eux ce qu'ils ont reçu, ils le ressentent comme un élan d'amour. Amour auquel chacun d'eux imprime la marque de sa personnalité. Amour qui est alors en chacun d'eux une émotion toute neuve, capable de transposer la vie

humaine dans un autre ton. Amour qui fait que chacun d'eux est aimé ainsi pour lui-même, et que par lui, pour lui, d'autres hommes laisseront leur âme s'ouvrir à l'amour de l'humanité. Amour qui pourra aussi bien se transmettre par l'intermédiaire d'une personne qui se sera attachée à eux ou à leur souvenir resté vivant, et qui aura conformé sa vie à ce modèle. Allons plus loin. Si la parole d'un grand mystique, ou de quelqu'un de ses imitateurs, trouve un écho chez tel ou tel d'entre nous, n'est-ce pas qu'il peut y avoir en nous un mystique qui sommeille et qui attend seulement une occasion de se réveiller? [...] Ici, elle répond à l'appel d'une personnalité, qui peut être celle d'un révélateur de la vie morale, ou celle d'un de ses imitateurs, ou même, dans certaines circonstances, la sienne ».

- (12) *Ibid*, pp. 1149-1150, 215-217
- (13) Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des Évangiles*, p. 112 : « Toutefois, s'il y a deux sources de la morale et deux source de la religion, la morale close et la morale ouverte, la religion statique et la religion dynamique ne font pas quatre formes de l'existence humaine, mais *trois*: morale ouverte et religion dynamique ne constituent qu'une voie [...] ». 強調引用者。
- (14) *MR*, p. 1173, 247 : « Car l'amour qui le consume n'est plus simplement l'amour d'un homme pour Dieu, c'est l'amour de Dieu pour tous les hommes. A travers Dieu, par Dieu, il aime toute l'humanité d'un divin amour. Ce n'est pas la fraternité que les philosophes ont recommandée au nom de la raison, en arguant de ce que tous les hommes participent originellement d'une même essence raisonnable ».
- (15) *Ibid*, p. 1189, 267 : « Dieu est amour, et il est objet d'amour: tout l'apport du mysticisme est là ».
- (16) *Ibid*, pp. 1191-1192, 270
- (17) *Ibid*, pp. 1006-1007, 34 : « L'autre attitude est celle de l'âme ouverte. Que laisse-t-elle alors entrer? Si l'on disait qu'elle embrasse l'humanité entière, on n'irait pas trop loin, on n'irait même pas assez loin, puisque son amour s'étendra aux animaux, aux plantes, à toute la nature. [...] La charité subsisterait chez celui qui la possède, lors même qu'il n'y aurait plus d'autre vivant sur la terre ».
- (18) *Ibid*, p. 1148, 215 « mais la première (la religion) n'en restera pas moins essentiellement action, et la seconde (la philosophie), par-dessus tout, pensée ». 括弧内引用者。
- (19) *Ibid*, p. 1184, 261 : « la déification définitive ».
- (20) *Ibid*, p. 1238, 329
- (21) また、ベルクソンが対象なき愛という観点からキリスト教を高く評価したという点については、Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des Évangiles*, pp. 119-120を参照。
- (22) *MR*, p. 1245, 338 : « L'humanité gémit, à demi écrasée sous le poids des progrès qu'elle a faits. Elle ne sait pas assez que son avenir dépend d'elle. A elle de voir d'abord si elle veut continuer à vivre. A elle de se demander ensuite si elle veut vivre seulement, ou fournir en outre l'effort nécessaire pour que s'accomplisse, jusque sur notre planète réfractaire, la fonction essentielle de l'univers, qui est une machine à faire des dieux ».
- (23) *PM*, pp. 1448-1449, 249-251.
- (24) *ES*, pp. 877-878, 82-84.
- (25) *MR*, chapitre 4.
- (26) Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des Évangiles*, p. 76 : « avec l'homme non seulement la conscience n'est plus captive des mécanisme qu'elle a montés, mais elle transforme ces mécanismes en machines dont elle le contrôle et, par suite, en « instruments de liberté » ». *グイエの典拠は以下*。 *EC*, p. 719, 264 : « Il s'agissait de créer avec la matière, qui est la nécessité même, un instrument de liberté, de fabriquer une mécanique qui triomphât du mécanisme ».
- (27) *MR*, p. 1120-1123, 179-182. この箇所ではベルクソンは、文明化されていない人々は、努力が欠如していたのだ

と論じる。

(28) Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, pp. 150-152.

(29) このベルクソンの最後の一節について、PUFの新版の注(p. 510, note sur chapitre 4 131)はシュヴァリエの本の上記(本論文の注28)の箇所を参照し、聖書の詩編に似た箇所があると示しつつ、「La dernière phrase...pourrait donc être admise d'un point de vue théologique chrétien」と結論付けているが、本論文中で論じてきたように、私はこの見解には疑問を覚える。ベルクソンの哲学の原典を聖書の中へと求めず、ベルクソンの哲学自体に沿った冷静な読み方をすべきであろう。

参考文献

ベルクソンの著作

底本は *HENRI BERGSON OEUVRES* Édition du centenaire Press Universitaires de France

『ベルクソン全集』 生誕百周年版 フランス大学出版

本論文中で扱った各著作については、以下の翻訳を大いに参考にしたが、引用に当たり、引用者が訳し直した場合がある。

L'évolution créatrice (=EC), 1907

『創造的進化』ベルクソン全集4新装版、松浪信三郎、高橋允明訳、白水社、2007年

L'énergie spirituelle (=ES), 1919

『精神のエネルギー』原章二訳、平凡社、2012年

Les deux sources de la morale et la religion (=MR), 1932

『道徳と宗教の二源泉』平山高次訳、岩波書店、1992年

La pensée et le mouvant (=PM), 1934

『思想と動くもの』河野与一訳、岩波文庫、2007年

* 『思想と動くもの』はそれまでの小論文や講演を集めたもので、実際の執筆は『道徳と宗教の二源泉』の方が後

先行研究

今回取り扱ったテーマについて、以下の先行研究及び翻訳に加え、『二源泉』のフランス大学出版の新版を使用した。中にはキリスト教から十分に距離を置いていない点で注意が必要と思われる著作もあるが、いずれの文献も示唆に富んだものであった。

Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, 1931

ヴラジミール・ジャンケレヴィッチ『アンリ・ベルクソン』(増補改訂版)

阿部一智、桑田禮彰訳、新評論、1997年

Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des Évangiles*, Vrin, 1987

Maurice Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie*, 1953

_____, "Bergson se faisant", 1959

使用した底本は *Maurice Merleau-Ponty éloge de la philosophie et autres essais*, Gallimard, 1971

モーリス・メルロ＝ポンティ『哲学者とその影』メルロ＝ポンティコレクション2、木田元編、木田元、滝浦静雄訳、みすず書房、2001年

Frédéric Worms, *Le vocabulaire de Bergson*, ellipse, 2003

Anthony Feneuil, *Bergson Mystique et philosophie*, PUF, 2011

その他

Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Plon, 1959

ジャック・シュヴァリエ『ベルクソンとの対話』仲沢紀雄訳、みすず書房、1969年